慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ファウストとヘレナの出会い : 「ファウスト」第二部第三幕の一つの解釈
Sub Title	Die Begegnung von Faust und Helena : Eine Interpretation des dritten Akts von ,,Faust" II
Author	鈴木, 威(Suzuki, Takeshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1968
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.25, (1968. 3) ,p.383- 400
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	英語英文学・独語独文学特集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00250001-0383

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ファウストとヘレナの出会い

—「ファウスト」第二部第三幕の一つの解釈—

鈴木　威

I

「ファウスト」第1部におけるファウストは，「世界を最も奥深いところで統一しているもの」（V.382～3）を求めるに急なあまり，自我を限りなく主張して官能の深みにはまり，しかし幸いにも世俗的享楽の倦怠を痛感しつつ，新たな活動の場を求めて第2部の諸場面へと入ってゆく。第2部に入ると，ファウストのこれまでの，自我を外に向けて主張するシュツルム・ウント・ドラング的な性格は影をひそめ，彼は自然に向って謙虚であらんがために，自我をむしろ内に向けて主張しようとする。ゲーテ自身，イタリア旅行を転機に北方の暗い衝動と訣別して，古典古代の人間の生き方に共感を覚えたことを考えれば，第2部のファウストが，自然に対する畏敬の念を一段と強めて，自然から送り出される神々の啓示を待つという態度に変わるのも不思議ではない。

第1部「夜」の場で，人間の「言葉」Wort たる，哲学，法学，医学，神学，等々の既成の学問が，一向に自然の門戸を開いてくれないことに絶望したファウストは，「永遠の生命の潮，行動の嵐の中にあって」（V.501）「永遠の海原，転変する生動，灼熱する生命」（V.505～7）である地霊にうながされ，本能のおもむくままに行動する。「黄金の木」なる大地に立って，「全人類に課せられたものを，私は，自分の中にある自我の内部で味わおう。自分の精神でもって最高にして，最深のものをつかみ，全人類の

喜びも悲しみも共にこの胸に積み重ね，こうして私自身の自我を全人類の自我にまで拡大しよう」(V. 1770～4) とするファウストは，自己の内に宿るデモーニッシュな「力」Kraft を抑制出来ず，逆にこれにふりまわされて罪の数々を積み重ねてゆく。ファウストは，世界を統一している根源的一者を全く予感することのないうちに，灰色の書斎を出，その根源的一者が多へと分散し，繰り返し現象してくる大地へ身を投げ出した。しかし，時間と空間のうちに存在する現象的世界には，それを生み出す統一者を直観することなくしては，何一つとして真理はなく，互いに孤立した多くの事物が，等しい価値の許に意味もなく展示され，また相互に力関係を変えつつ存在するだけである。「調和もとれぬおびただしい森羅万象が，忌わしくも雑然たる響きをたてている」(V. 144～5) この大地の上にあって，自然の何一つ真理と認められなくなってしまったファウストにとっては，このデモーニッシュな自我の力だけが，ただ一つの真理なのであった。彼は，これら無意味な存在者の瓦礫の山を，自ら，神にも似た面持で再統一しようと試る。自我を世界の中心に据え，孤立している諸事物に，自我から流れ出る生命力でもって生命を吹き込み，それらを相互に「必然」の絆で結びつけ，意味と価値とを与えようとする。自ら大地の主人になろうとする限り，ファウストは，無限に存在する断片的な諸事物すべてに，自我の影響力を与えねばならず，一つ，また一つと，大地に醱積する事物を征服してゆかなければならない。大地はすべて彼にとって敵対者であり，しかも彼は益々強く現象世界の事物にかみついてゆかざるをえない。無限の諸事物から成るこの大地は，根源的一者の現象して来たものとして，なるほど自らを現わしているには違いないが，個々の品物，個々の事件に固執する倭小な自我にとっては，この大地の根底にあるはずのもの，この現象の背後にあるはずの本質は直観されずに終ってしまう。ファウストは，世界の根源的一者を求めようとして「生の黄金の木」なる大地に降り立ったにもかかわらず，その核心へ迫る求心運動とは逆に，それに背を向けてしまう遠心的方向へと，現象面で活躍していたにすぎない。彼が唯一の真理のつもりで築いた自我の帝国，即ち，自我の独裁する諸事物の秩序は，妄想

である。何故なら，この帝国は，これ全体を含めた現象世界一般を産み出す根源世界に保証されない限り，真理とはいえないからである。唯一の真理が，生成する世界根拠であることを忘れた時，人間はそれから手痛い復讐を受けなければならない。ファウストは，グレートヒェン悲劇を通して，大地の運命の苛酷さに呆然自失するが，結果的にみれば，彼の自我の帝国は，生まれてきたのも真実であったし，亡び去ったのも真実であったのである。が，そのことは，彼がヘレナの導きによって，真理の開示を体感したあとにわかることである。

「ファウスト」第2部は，第1部の人間臭い悲劇から一転して，優しい大地の描写から始る。大地と闘ったあげくに，不遜の故に大地から復讐を受けたファウストの自我は，闘争力を失って，眼りを求めているが，偶然，この生命力の衰えた自我に，今まで見失われてきた自然の美が，優しい力を秘めて近づいてくる。ファウストに傷を与えた敵対者としての大地は，今度は，ファウストの傷を癒す友として現われる。妖精達は，「彼をレーテの河水の雫で浴みさせ」（V.4629），「彼を聖なる光の中へ」（V.4633）返してあげようとする。生身を焼きつくした苦行がすでに遠くの想い出にしかすぎなくなったファウストが，今そこから得た教訓は，飛瀑のしぶきに映し出された虹の比喩である。

しかしこの荒々しいしぶきの中から，
常なき常なる七色の虹の浮び出でる美しさ。
あるいは鮮かに，あるいはかすみ，
あたりいっぱいに，馨しくも涼しい霧を散らせてている。
あの虹こそ人間の努力を映し出す鏡だ。
あの虹に思いを寄せれば，はっきりと悟りが開かれよう。

彩られた光の照り返しの上に，われわれの人生はある。(V.4721～7)

生まれては亡びてゆく一粒の水しぶきには何の意味も価値もそなわっていないこと，しかしまた，この一粒の水しぶきが，不滅の虹を産み出すための生贄として，その担い手として大きな意味と価値とを持っていること，さらにこの虹は，日の光の一つの属性であること，すなわち，水への光の

顕現であること，これらが虹の教訓であった。一粒の水しぶきが，自らの永生を願おうと，また自らを中心に据えて，その遠近法によって価値の体系を創り出そうと試みようとも，それは徒労に終らざるをえない。一粒の水しぶきにすぎないファウストの自我の意味，ないし価値は，自分から創り出すことは出来ない。彼の意味は，他者への奉仕の中に，すなわち虹にたとえられる永遠の形象を産み出すために，自分を犠牲にする時に初めて生ずることを，ファウストは悟る。この後のファウストは，以前と同じく大地に密着して活動はするものの，もはや自己中心的な官能主義者ではなく，永遠の形象美の根源現象のためには，喜んで自らを犠牲に供しようとする芸術家である。

イタリア旅行直後の，厳密な意味での擬古典主義の時代を体験したゲーテにとって，また，「向上する自然の最後の産物は美しい人間である」[1]と考えるゲーテにとって，ファウスト伝説に現れるヘレナは，あらゆる芸術家が求める永遠の美の形象の比喩となる。しかし晩年のゲーテにとって，ヘレナは単に美しい一つの事物として意味をもっているだけではなかった。彼は，ヘレナに示された美をもって，世界の謎を解こうとしている。ヘレナの美の価値は，地上の暗く惨めな諸事物に，一なる存在の光を与え，それらを明るい世界の内部に定着させてしまう点にある。あらゆる体験を積もうとしているファウストにとって，ヘレナ悲劇の体験は，芸術体験を通しての世界の洞察である。仮借のない没落の法則だけしか支配していない大地の上では，有限な事物を，有限な事物の方から接近して救うことが出来ないことを悟ったファウストは，ヘレナという古代の悲劇芸術を中心に据えることによって，悲劇的な世界の本質を認識し，それと同時に悲劇そのものを，悲劇的な歓喜へと止揚してしまおうと試る。それ故第3部に現れるファウストの悲劇的なパトスは，決して受動的な厭世主義に終っているものではない。むしろ，地上の悲劇的人間を，悲劇的な姿のままで救ってしまおうとする能動的なデモーニッシュな力である。このことをファウストに，身をもって教えるのが，この第3幕のヘレナなのである。

Ⅱ

さて，ヘレナの到来を，劇の筋にそって見てみよう。

アルプスの草原で活力を得たファウストの自我は，再び大地に立つと，ヘレナを最も厳しい意味で，現実のものにするために努力する。第1幕最後の「騎士の間」の場で，ファウストが見るヘレナの像は，恐らく，ゲーテがヴインケルマンを通して初めて知った古代ギリシャの形象であろう。それは，ヴィンケルマンが「高貴な単純さと静かな偉大さ」と規定した古典美の典型，有為転変する現実の世界を超越した静謐な美である。しかしここに現れた永遠のヘレナは，大地での苦行を充分に積んでいないファウストにとって，よそよそしい一つの美しい事物，即ち，単に観念的な幻にすぎない。美を求める者が，未熟であったり，大地から足を離したりすれば，永遠の形象も単にペシミスティッシュな夢にすぎなくなるであろう。単なるロマンティッシュな激情に押し流されたファウストが手を触れると，そのヘレナの影は霧散して，第1幕は閉じる。

第2幕は，ファウストがヘレナを古代ギリシャの文化の地底から改めて創り出そうとする苦行であり，芸術家の根源的活動の比喩である。

ゲーテは，「ファウスト」第2部を，第3幕のヘレナ悲劇から書き起したわけであるが，これの事実上の執筆期が1825年から27年にかけてであることを考える時，ここに登上するヘレナは，古典古代の形象美といえども，ゲーテにとっては，単なる文化遺産としてだけの静謐の美に終るはずはなかった。ヘレナ悲劇を書いたこの時期のゲーテは，単に擬古典主義でも，また勿論単にシュツルム・ウント・ドラング的でもなく。両者のジンテーゼの上に立っていたであろう。ヘレナに托した形象美を考えながら，ゲーテは，それを産み出すために要した莫大な自然のエネルギーを同時に考えていたに違いない。シュツルム・ウント・ドラングの精神を，人にも増して強く体験したゲーテが，ホメールの世界に接する時，彼は，そこに現れた，人間臭さを超越した美しい夢と同時に，その裏あって，人間にも等しく働く苛酷な運命の力に共感を覚えていたであろう。万事に区別を設

けたがらないゲーテにとって，北方ゲルマンに特有であるはずのデモーニッシュな力は，当然，南方ヘラスの土壌にも等しく働いているはずであった。ファウストがヘレナを再創造するために行為する大地は，「古典古代のワルプルギスの夜」と名づけられているが，本来，「ワルプルギスの夜」は，北方文化の生産的なカオスであったはずである。それに異質文化である「古典古代」の形容詞を付したところに，矛盾を総合した晩年のゲーテの精神はあった。ヘレナという永遠の形象は，暗い地底で沸騰する元素，醜い伝説的な怪物，オリンポスの神々が生まれる以前の半神等からの昇華なのである。ファウストが現実にヘレナを手に入れるためには，既成のヘレナ像を模倣するだけでは不可能であり，既成のヘレナをもう一度，それを産み出した地底のカオスに還元し，そこから改めて自らの愛の造型本能でヘレナを地上へ連れ戻さねばならなかった。水の祭典の最後の場面で，地水火風が秩序なく流れ合う地底のカオスに秩序をもたらす力は，「万物の始源であるエロス」（V.8479）と名づけられている。これは，大地の上の人間の知性にもとらえうるような美しい仮象を作り出す，何か精神的な造型作用の比喩であろう。芸術家としてのファウストが永遠の美の形象を現実に手に入れるための修業は，こうした自然のカオスを見聞することで終る。ヘレナの美の仮象の裏に，それが優れていればこそ，デモーニッシュな，永遠に衝動的な力があるのを感じとったのは，ゲーテの卓見であった。

冥界から呼び出されたばかりのヘレナが述べる第3幕冒頭の独白は，伝説に歌われたヘレナ，オイリピデスをはじめとする悲劇詩人に歌われたヘレナの姿を改めて構成する。毀誉褒貶の入り混じる世人の批評が示す通り，彼女は美しいが故に返って多難な運命を授ったのであった。しかし，この「スパルタにおけるメネラスの宮殿の前」におけるヘレナの性格は，ホメール的世界の存在として，また万人が疑わない美の顕現として，いかにも古典美的な性格をもっている。「王妃の身にふさわしく」（V.8057）「ツォイスの娘として」（V.8647）「どんなに恐ろしい椿事が生じてもとりみださず」（V.8915）「悲しみこそすれ怒らない」（V.8915）態度は，終

始一貫してこの場面に現れ，自分の役柄をわきまえた古代的中庸の印象をわれわれに与える。また，合唱団が歌うヘレナの讃歌「至高の幸は君にこそあれ，美と呼ぶ誉にまさるものなし。……頑なる勇士も，強き美には心屈っせん，」（V.8518～23）「汝が美が黄金，真珠，宝石と，戦う様こそ見ものなれ」（V.8566～7）また，ヘレナの罪状を暴く老醜，フォルキアス・メフィストーすら思わず口にする言葉，「白鳥の如きお美しさ」（V.8808）「薄衣におおわれていてさえ人目をひきつけなさる今日の真昼の太陽よ」（V.8909～10）などは，ヘレナの文化遺産的な華麗さをわれわれに印象づけている。しかしこのようなヘレナの形象美が，決して美の空虚な不遜さを印象づけないのは，ヘレナ自身が自分の美しさを，また自分自身の生存をも，自己中心の遠近法で眺めていないためである。彼女の遠近法の中心は，常にオリンポスの神々の中に，大自然のデモーニッシュな力の中にある。彼女が美しいのも，また美しいが故に，人にもまして栄光と悲惨さを背負うことになるのも，人間の力の及ばない運命のいたづらであり，ヘレナ自身このことを自覚している。彼女は，この彼女の生存全体をつつんでしまう問題においても，自分の枠を踏みはずそうとしない謙虚さを持っている。

私は良人の命令でひと足先に都へ帰されました。
けれどそれがどんな思召しによるものか私にはわかりません。
妻として帰されたのか。王妃として帰されたものか。
それとも王の激しい苦痛や，ギリシャの民の
長い苦しみの生贄として帰されたものか，私には定かでありません。
私は戦いとられはしましたが，捕虜であるかどうかははっきりしません。
何故というに，不死の神々は，美しく生まれついた私に，憂うべき道づれとして，二つの面をもった名声と運命とを授けられたからです。
（V.8525～33）
すべてを畏い神々におまかせしましょう。
神々は，人間にとって善であれ，

悪であれ，

何事も御心のままにとり行わせられる。

私達，死をまぬがれえない人間は，忍従するだけです。(V.8583～86)

自然への信頼と運命への忍従とは，一般に認められているホメール的世界の重要な特徴であるが，この性格を，ゲーテは，意識的に利用することによって第3幕を展開してゆく。この「メネラスの宮殿の前」が，わずか2・3百詩行ゆく間[(2)]に極端に古代的な印象を醸し出してくるのは，運命への忍従ということが，言葉で語られていることが大きな原因であろう。ヘレナは，自分の美も，またその美が災いして，自分や他の多くの英雄達やを不幸に陥れることも，自明の理として受け入れている。何故なら，こうした彼女の人生行路は，彼女の責任においてなされたものではなく，神々の責任においてなされたものだからである。ヘレナ自身の責任は，大自然の中にはっきり生きていることを感じとることだけにあったのであり，その結果が善をなしたのか悪をなしたのかの責任は，神々の判決にまてばよいのであった。この意味で，伝説上のヘレナは，与えられた限界の中で，すなわち，宿命の時空その他の条件の中で，自分の責任は立派に果たしたのであったし，それ故，現実に生きていたのであった。ゲーテは「ヴィンケルマン」の中で次のように述べている。「近代人は，われわれの今までの場合がそうであったように，ものを考える場合，きまったように無限界へと飛んでゆく。そしてあげくのはては，もし運がよければ，限られた一点につき戻される。古代人はそんな回り道などせず，当初から，美しい世界の愛すべき限界の中に，彼らのたぐいない堅忍持久を感じていた。彼らはこの限界の中へ置かれ，ここに召し出されていて，彼らの活動は，この限界内に働くことを見出し，彼らの熱情は，ここに対象と滋養を見出していた[(3)]」。後述するが，ゲーテは，生きるということを，人間が無限へ心を開きつつ，限界の中へいさぎよく没入することだと考えていた。ゲーテは，ヘレナをファウストと結びつけるという突飛な出来事を生じさせるためには，即ち，ヘレナを現実の中へ引き出すためには，ヘレナに，何よりも先ず，「ここ」という限界の中にいることを実感させなければならないと考

えたのであろう。昔一度，「ここ」という限界の中で，自分の現実の責任を完全に果たしたヘレナであってみれば，逆に今度は，限界を与えることによってヘレナをもう一度現実に呼び戻せるという可逆性を，ゲーテは信じていたのではないだろうか。第3幕冒頭で地上へ呼び出されたヘレナが，厳しい意味で現実的になるためには，ファウストと結ばれる瞬間まで待たなければならない。

さて，ヘレナをファウストの許へ連れてゆく役目はフォルキアスが負っている。彼女はヘレナを古代ギリシャの土壌から離すために，まずヘレナの古代的性格，すなわち，運命への帰順の信念を疑わせるところから始める。トロイ戦争で幾多の勇士を殺戮する原因となり，また幾多の男を不倫へと導く原因となったヘレナの美を，ヘレナ自身は，神々の思召と信じて疑っていないが，フォルキアスは，シュツルム・ウント・ドラング的な精神，近代人の精神として，運命や神々を否定しているために，ヘレナに向って，ヘレナが責任を感じていないこの種の罪を，ヘレナの自我に背負わせようと努力する。8845行目から始るフォルキアスの弾劾は，ヘレナに美の悲劇性を改めて感じさせると同時に，ヘレナの美の宿命をヘレナ自身の罪禍と認めさせるに充分の効果がある。フォルキアスの計算通り，ヘレナは過去の悲運を自分の責任において考える時失神し（V.8891の後），再び意識を取り戻してからは（V.8909の前），運命への信頼感が次第に揺らいできており，フォルキアスを前よりは頼もしい相談役と認めるようになる。この後のヘレナは，オリンポスの神々に合わせていた焦点を，次第に自我の方へ引き寄せてくる。例えば，これまでは疑うこともなかった「生贄」を否定し，「ともかく助かる道があれば喜んで従いましょう」(V.8963)と言い，神々の他に賢人を認めなかったものが，「賢い，視野の広い人には，きっと，不可能なことも可能になることがあるのでしょう」(V.8963)と言って，暗にフォルキアス個人の才能を認めようとする。こうしてヘレナは，知らず知らずのうちに時代を下って，フォルキアスの思惑通り，ファウストの許へ保護してもらいに行くことになり，「私は，当面思い切ってできることを考えた。……ともかくお前に従って城に行くことにしまし

ょう（V. 9071～4）と決心のほどを語る。結果的にみれば，ヘレナは本来のギリシャ的な性情を失わないままに，ジンテーゼの次元でゲルマンのファウストと結ばれ，「ここ」という世界の必然的な現象と化した確証を得て現実的となるのであるが，それを論ずるためには，先ずもって，ゲーテ晩年の世界観，人生観を，簡単にみておかなければならない。

Ⅲ

ゲーテが「ファウスト」第2部の完成を急いでいた頃の「詩と真実」第4部の中に，次のような「デモーニッシュ」の定義がみられる。

「そして自然のうちに，生あるものにも生なきものにも，魂あるものにも魂なきものにも，ただただ矛盾した姿でしか顕現しないので，どんな概念にも，ましてどんな言葉にもとらえきれないような何ものかがあるのを発見したような気がした。それは非理性的に見えたから，神的なものではなかったし，悟性をもたなかったから，人間的なものではなかったし，善意あるものだったから，悪魔的なものではなかったし，しばしば他の不幸を喜ぶ風があったから，天使的なものでもなかった。首尾一貫性を示さなかったから，偶然に等しく，関連を暗示していたから，神の摂理にも似ていた。われわれを制約しているあらゆる事物も，このものにとっては浸透できるように思われ，それはわれわれの存在の必然的な諸要素を思うままに処理するように見え，また時間を凝縮し，空間を拡大した。ひたすら不可能事だけを喜び，可能事をせせら笑ってしりぞけるように見えた。それ以外のすべての事物の中に侵入して，これを分離したり結合したりするように思われたこのものを，私はデモーニッシュと名づけた。古代の人々や，またこれに似たものを認知した人達のひそみにならったのである。[4]」デモーニッシュなものとは，大宇宙に充満しているエネルギーであり，獰猛に生成して休むところを知らない単なる力である。それは，人間が事物を認識する場合に用いる，時間，空間，因果関係等の様々の言葉を超越して運動している。善や悪，美や醜の価値判断を絶して働き，ただ単にそれ自身真理であるような全一的な力である。人間の言葉の外に存在し，盲目的に

無慈悲に生成しようとするこの力は，しかし同時に，自分を人間の目にも触れさせようとして，自己を細分化してみせる。これが，人間の挨って立つ自然，大地である。こうして，われわれの知っている世界とは，力の所産，表現であり，また生成しつつも時空のうちに凝固した力である。それ故，デモーニッシュな力は，自然のどんな小さな部分にも完全に力を失わずにいる。「自然は際限のない多産性であり，あらゆる空間をうめつくしてしまう。大地の上を見るがよい。われわれが悪と名づけ禍いと呼ぶものは，産み出されたすべてのものに空間を与えることが出来ないために，いわんや，持続と永遠を与えることが出来ないために，発生するのである。産み出されたものは空間を欲し，持続を欲する。それ故，他者を押しのけ，他者の空間を掠奪し，他者の持続を断ち切ろうとする(5)」。

大地の諸物は，本来一なる世界根拠のこのデモーニッシュな力が多へ分化したものであり，しかも皮肉なことに，多の個々が互いに闘争し合っているとは，不断に自己の刃を自己の肉につきたてていることである。こうしたデモーニッシュな力が人間の世界に現れた場合には，悲劇的なドラマにもなる。「詩と真実」の中で，ゲーテは「エグモント」に関してこういう。「この主人公を特徴づけている個人的な勇敢さは，彼の全体性を支えている基盤であり，それが発している母胎である。彼はおよそ危険というものを知らず，身辺にせまる最大の危険に対してさえも盲目的である。……デモーニッシュなものは敵味方に働いており，この二つのものの衝突の中に，愛すべきものが亡び，憎むべきものが凱歌を奏し，次いでこの衝突から第三のデモーニッシュなものが生じて，万人の願望が叶えられるであろうという期待が出てくる(6)」

シュツルム・ウント・ドラング時代のゲーテ，また第1部におけるファウストは，それとは知らずに，この種のデモーニッシュな力に身をまかせていたのであった。人類の叡智が，これらデモーニッシュな力を抑制しようとして考え出した道徳をすべて破壊し，自らの自我にそなわるデモーニッシュな力のみを信じて巨人的に行動していた。彼らは，個に現れたデモーニッシュな力そのものである本能に身をまかせ，これを抑える一切の軛

を悪として否定したのである。世界に内在する根源的一者としてのデモーニッシュな力をまだ知らない彼らにしてみれば，地上に転変する無数の諸事物は，互いにバラバラで全く関連をもたず，また偶然に存在している断片にすぎなかった。地上の一切の事物を虚偽とみる彼らには，大地の主体は，大地の真実は，彼らの自我しかない。彼らは，唯一の真実と見做しているこの自我の網でもって，地上の諸事物を掬ってやることでもって，自ら，それら諸事物の救世主たらんと，不遜にも考えた。ところが，多くの諸事物を自らの責任として背負いこんだ自我は，これら諸事物の内に働く同じデモーニッシュな力の反抗に会って亡びる。彼ら自身がまだ気づいていない世界の真の主体，すなわち，一としての力が，人間を地上の主体として許すはずは初めからなかったのである。結局，彼らの自我は，地上の諸事物に吸いつきすぎ，それを越えたところに君臨する世界根拠そのものを予感する謙虚さがなかったために，大地にうらぎられた気持で，不遇のうちに亡ばざるをえなかったのである。地上の個々の事物に働くデモーニッシュな力は知っていても，彼らは，それらと共にありながら区別を知らない一なる力には心を開いていなかった。人間の無力さを認めるには若すぎ，世界の力と比して極微の力にすぎない自我を唯一の力と信ぜざるをえなかったがために，彼らは，世界の力としての苛酷な運命に復讐されたのである。

ゲーテ・ファウストが，こうした北方的，近代的デモーニッシュな人間の呻吟を，歓喜の声に変えてしまうためには，運命への帰順を当然のこととして信じているヘラスの精神を知る必要があった。。古代人のこの種の諦念は，それまでのデモーニッシュな巨人の目には，単なる敗北としか映らなかったであろう。しかしゲーテは，ギリシャ人のオリンポスの神々の代りに，世界根拠としてのデモーニッシュな力を代入することによって，両者を総合し，個としてのデモーニッシュな力が，一としてのデモーニッシュな力に還元される点にこそ，人間の幸福の絶頂があるとした。「私は古代の心が，現世と現世の宝とをめざしていたことを述べた。こう述べていてすぐに思い出されるところは，ただ異端的な心とだけ協和することが

できるということだ。古代人の，あの自分自身への信頼，あの現在的活動，神々を祖先として崇拝し，いわばただ美術品として神々を嘆賞し，人間には抵抗できない力を持った運命への帰順，名誉が死後にも香り高く伝えられていることを知ると，来世へかけた名誉が再び現世の活動へふり向けられるようになるということ，そんなことは，みな必然的に関連して，分かちえない一つの全体を形づくっている。そして自然が人間というものについて意図した状態をめざして，自己を形成し，享楽の最高の瞬間においても，犠牲の，それどころが破滅の最底の瞬間においても，一つの，ゆるがない健康を自覚している(7)」。

古代人と現代人，ヘラスとゲルマンとの価値観の相違は，何よりも先ず，遠近法の視点の置き所にかかっている。前者は，自然，ないしは自然の根底である神々の中にそれを置き，後者は，自我の中にこれを置いている。古代人には，神々，自然，運命という，人間悟性からみれば不合理なものを「信ずる」健康な精神が，そなわっている。彼らは，神々が用意してくれてあるはずの，しかし自分にだけはまだ隠されている自分の運命を，自由意志をもって探し求める。世界の主体は神々であり自然なのである。この真の主体に帰りつくことが出来なければ，このことこそ，彼らにとっては最大の恥辱であろう。時々刻々顕わになる，あるいは神託に前もって現れる，自分のために用意された運命が，幸であれ不幸であれ，善であれ悪であれ，これを全うした時にこそ彼らの誉は生ずるのである。それ自身で厳として至高の価値の座についているものは神々であって，人間の有する価値，また人間が個々の事物に与える価値は，すべてこの至高の価値の一点へ向って延びる線上にある。古代人の心は，かくして，常に神々の方に向って開かれていることになる。と同時に，彼らは，無限なる神々を人間が直接とらえないことを知っているために，地上の有限な諸事物と深く関わろうと努力する。個々の事物がうすぎたなく醱積している大地も，これまた彼らにとっては，かけがえのない生存の場なのである。「彼らはこの限界の中へ置かれ，ここへ召し出されている。彼らの活動は，この限界内に働くところを見出し，彼らの情熱は，ここに，対象と滋養を見出してい

た。……古代においては，……詩人であっても歴史家であっても科学者であっても，皆一様に，最も近いもの，真実なもの，現実のものにしっかり寄りそっていた。彼らの作り出したものは，たとえ幻影でさえも，骨と髄とをもっている。……古代人は幸福を楽しむことにかけて達人であったし，不幸に耐えることにかけても達人であった。[8]」こうして古代人の感官は，個々に分散している自然に密着しながらも，心は自然の根底で統べている全一的な自然を，神々を求めていた。もしドグマ的なキリスト教が，自然を少しでも悪と見做し，また，神へ至る道を少しでも規制するのであったら，その意味で古代人の心は異端である。

他方，既成のドグマ的神の存在を否定した近代人は，この意味でやはり異端ではあるが，しかし，古代人の自然に相応するような信ずべき最高の価値が何もない。結局，最も簡単に信じられうる自己内のデモーニッシュな力，すなわち自我を，最高の価値と錯覚する。近代人も，古代人と同じく大地の事物には深く関わり，出来れば世界の拠って立つ根拠を究めたいと願っているものの，不遜になりすぎた自我は，自分に納得のいかないような方法で世界根拠へ接近すること，すなわち，悟性が「必然」と認めないような方法で世界根拠を究めることは，許し難い不徳と信じている。結局彼らは，人間の姿を世界根拠に押しつけようとする茶番劇を演じていることになる。彼らは，自身，大自然の一部として大いに勢力をふるい，個としての使命は全うしているには違いないが，この方向への活動がゆきすぎると，石ころにも近い事物，すなわち，世界の光に照らして自分の存在を疑ってみることを知らない事物になりさがってしまう。

このように，なるほど近代人は大地の主人として，地上の諸々の事物の境界を，アナロギーをもって取り除いてゆく，すなわち，時間と空間の区別を一つずつ取り除いて，無限になろうと欲する。しかしそれだからこそ，世界の真の主人，一なる無限の力を認められないでいる。他方，古代人は，大地の諸事物相互間の境界を近代人ほど性急に取り除こうとしないばかりか，むしろその境界の中へ身を沈めてしまおうと努力する。そしてこれらの事物に深く関わることによって，そこにかもし出されてくる無限

なる大自然の光を，雰囲気 Atmosphere として感じとっている。「自然は神を隠している[6]」とか，「自然からは，どの側面を見ても，無限なものが流れ出ている[10]」，「生きたものはすべて，自分のまわりに雰囲気を作り出している[11]」とゲーテが言う時はこの意味においてである。

「真理は神に似ている。それが直接姿を現すことはない。われわれは二，三の徴候 Manifestation から，真理を憶測しなければならない[12]」。

Ⅳ

さて本題に戻って，ヘレナの再来の場面を見てみよう。ヘレナは，「古典古代のワルプルギスの夜」から，ファウストの努力と，ヘレナ自身の努力と，さらには神々の恩寵とから，再び地上に現れてこようとしている。「生命単位は，分離したり結合したり，普遍に帰ったり特殊に留ったり，変化したり固別化したりするが，これこそ生命単位の根本性質である。……それ故たとえどんなに特殊なものでも，地上において生起 sich ereignen する限り，結局は，一般者の像 Bild として，比喩 Gleichnis として出現するのみである[13]」。地上に現れるためには，無限だったものが特殊（eigen ないしは besonder）なものにならなければならない。こうなることが，地上で生を受けるための第1条件である。ヘレナは，今，ここ，という時空の境界の中に自己を限定し，しかも世界根拠の視点からみた必然の糸の中に組み込まれる時にこそ，生存 Dasein が許されることになる。これまで，冥府という永遠の無限定の地底に眠っていて，いまだにその夢から充分に醒めきっていなかったヘレナは，ファウストが単に物質的にではあるが用意しておいた限定の条件の中に入り込むことによって，現実に生まれてくる。

Ich fühle mich so fern und doch so nah
Und sage nur zu gern : Da bin ich! da!
私はひどく遠くにいるような，そのくせ近くにいるような気がいたします。
そして，ともかく喜んで申します。私はここにいる，ここにいると。

(V. 9411～2)

ここに，ヘレナは確かに地上の時空の中に降り来った。そして移ろい易い一つの存在者として，「近い」ものになった。しかしそれは，ヘレナが，第1部のファウストのように地上の事物にのみへばりついてしまっている低次元の人間として生れてきたという意味ではない。彼女は大地に足をつけたとはいえ，相変らず「遠く」にいるのである。第2部冒頭の虹の比喩になぞらえれば，ヘレナは，移ろい易い地上の水滴に根ざしながら，打ち開けた太陽の天空を求める永遠の形象である。

他方ファウストはまだ，移ろい易い地上の今，ここ，という限定しか知らない低次元の人間である。彼は，地上の幸福を通して現在の一瞬を永遠化しようとする，第1部のファウストの延長上にいる。と同時に，相変らず，現在の充実を求める誠実な人間である。

ファウスト　今や未来も過去も心にはなく
　　現在のみが——
ヘレナ　　私達の幸福
ファウスト　その現在こそ，宝，利益，財産，担保。
　　この確証は誰が与えてくれるのです？
ヘレナ　　私の手です。(V. 9381～4)

ヘレナの手が，ファウストに，現在の重みの確証を与えるという。ファウストがヘレナを本当に愛するや，ヘレナは現実になったと同時に，ファウスト自身，突然時空の断絶した境地を体験する。

私は息がつまり，体が震え，言葉が出て来ません。

まぎれもなく夢です。時もところも消え失せました。(V. 9413～4)

地上の，時空に区切られた事実しか知らなかったファウストにとって，ヘレナに引き上げられて垣間見た一なる天空は，余りにも強烈な体験であったに違いない。人間の言葉が，個々の事物につけられたものである以上，否，言葉の本質が，一なるものを個々に区別する機能である以上，ファウストがここに見た天空には，人間の言葉はとどかない。

ファウストはこれまで，今，ここ，という時空の限定の中にこびりつい

ていた。ファウストに限らず，人間はすべて，時空に区切られた事物が醱積する大地の上に生きている。そして，単なる断片，偶然としてころがっているそれら事物を，余すところなく必然の糸の中に統一してしまう根源的一者を，精神の力で求めている。ただし，これを求めるに性急な余り，大地の諸事物を無視して，その背後に「真理」を求めようとすると，人は，その人にそなわる大地の力，個に現われたデモーニッシュな力を失ってしまうことになろう。「事実であるものはどれも，すでに理論であることを理解すること，これが最高の叡智であろう。大空の青は，色彩論の根本法則を開示する。現象の背後をさぐる必要はない。現象それ自体がすでに理論なのだから」[14]。ファウストは，第1部の灰色の書斎を出て以来，常にこのゲーテ自身の忠告通り，大地に誠実に生きてきた。そして，秩序なく転変するこの大地を，未知の世界根拠の「理論」と認められるまでに成長しようと努力してきた。しかし，ヘレナに会う以前のファウストは，余りに情熱的にすぎたため，この最高の叡智に達することが出来なかった。地上的な瞬間の充実を求めるファウストに，「一般と特殊とは合致する。特殊というのは，それぞれ違った条件の許で現れる一般者なのだから」[15]という命題の重さを教え，また，余りにもデモーニッシュなファウストに，真理の静けさを，文字通り手をとって教えたのは，他ならぬヘレナである。ゲルマン的なデーニッシュな精神からはどうしても達することが出来なかった最高の叡智に達するためには，ヘラスのアポロンの精神からの助けが必要であった。

こうしてヘレナに出会うことによって，ファウストは，すべての価値の中心点を，もはや自我の中には置いていない。地上の一切の諸事物の価値は，一なる天空から流れ出した価値である。今やファウストの生存自体が，この大自然の中心点から眺められている。

Dasein ist Pflicht, und war's ein Augenblick.

生存は義務なのです。たとえ束の間であろうとも。(V. 9418)

ここでは，ファウストが地上の今，ここに生きているということは，もはやファウストの責任とは考えられていない。ヘレナであってみれば，生き

永らえようと思えばそう出来る「権利」があったであろうし，自ら命を断とう思えば，それも「自由」であったに違いない。しかし今や，彼の生存は大自然の必然の網の中に定着し，従って宇宙の公器として，それは，彼の自我にとって「義務」となった。ファウストは生きている限り地上に留って，相変らず諸事物の軋轢に会って呻吟するであろうが，しかし，彼が天空の太陽へ向けて常に心を開いている限り，その苦しみもまた，一なる世界のと等しい苦しみとして，世界の愛によって癒されるであろう。

註

以下に挙げるゲーテ著作引用文の巻数とページ数とはハンブルク版ゲーテ著作集による。

註1　B.12,　S.102

註2　Trunz の註釈によれば，この，第3幕冒頭のV.8489から，ヘレナとフォルキアスとの対決が始る直前V.8802までの265詩行は，1800年に手がけられたものである（B.3,　S.579)。この頃のゲーテは，おそらくまだ純粋な古代ギリシャ芸術の影響下にあって，ヘレナをフォルキアスと対決させて，ヘレナの性格を力づよく展開することが出来なかったであろう。

註3　B.12,　S.99

註4　B.10,　S.175f

註5　B.12,　S.369

註6　B.10,　S.176

註7　B.12,　S.99

註8　B.12,　S.99

註9　B.12,　S.365

註10　B.12,　S.365

註11　B.12,　S.371

註12　B.12,　S.366

註13　B.12,　S.369

註14　B.12,　S.432

註15　B.12,　S.433